



二段なぞ八題解読

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉見, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007218

二段なぞ八題解説

現在普通になぞなぞと呼ぶ、問いかけと答えから成ることは遊びを二段なぞと称している。これは「ナニナニとかけてナニナニと解く その心はナニナニ」のような三段なぞなど複雑な形態のなぞと区別するための呼称である。

中世から近世にかけての文献上に見られる二段なぞを考える場合、最も裨益するのが鈴木棠三編になる『新版ことば遊び辞典』（一九八一年、旧版は一九五九年）である。ここには文献上の二段なぞ一五〇〇余が解法と共に掲載されている。そこにある解法は他の研究者の発想になるものもあるようだが、多くは鈴木自身の考え付いたものと思われる。概ね妥当な解釈が示されているが、中には疑問を挿し挟みたくなる例もないではない。

この領域を手がける場合、誰でも鈴木業績を参照することが予想されるので、その『新版ことば遊び辞典』の成果を訂正

しておくことも意義あると考える。以下に筆者の理解と異なる例をいくつか取り上げたい。

二段なぞ関連の資料は特に断らない限りは以下のテキストに拠った。

○『後奈良院御撰何曾』

『天理図書館善本叢書六四』 なぞ 狂歌 咄の本（八木書店 一九八四年）

○『寒川入道筆記』

『中世なぞなぞ集』（岩波書店 一九八五年）

○『なぞのほん』

『天理図書館善本叢書六四』 なぞ 狂歌 咄の本

○『新かはりなぞづくし』

『雑芸叢書 第二』（国書刊行会 一九一五年）

○『御所なぞのほん』

東京都立中央図書館加賀文庫蔵本

○『新なぞづくし』

吉 見 孝 夫

『近世子どもの絵本集 江戸篇』(岩波書店 一九八五年)

○『新撰何曾遊背紐』

国立国会図書館蔵本

○『新板なぞづくし』

『新板なぞづくし』(稀書複製会 一九二〇年)

○『風流新撰なぞ尽し』

東京都立中央図書館加賀文庫蔵本

二

① 神楽を参らす 雀

『御所なぞのほん』三三番に次のようにあるなぞである。

神楽かぐらをまいらす すゞめ

鈴木(一九八一)は次のように解する。

神慮を鎮めることを「すずしめ」という。これを「すずめ」と誤解したものである。

確かに次の例のように神楽と「すずしめ」は結びつく。

ていとうの鼓の音、さつ／＼の鈴の声々に、ちはやの袖をふりかざす、神慮すゞしめの御神楽の音は、ひまもなし。

(「浜出草子」^{注一})

しかし誤解と断じて解釈する前に、原文のまままで解釈する道をまずはさぐるべきであろう。このままで解く私解は既に吉見孝夫(二〇〇二b)で以下のように示した。

神楽にも種々の形態があるが、近世で通常頭に思い描かれるのは巫女が舞う神楽である。例えば「そばきりきやくな

あに かみかぐらととく こゝろはうつてふるまふはさ
(『風流新撰なぞ尽し』) という三段なぞがある。これを載せる『風流新撰なぞ尽し』『当時流行なぞなぞ合』の挿絵にはいずれも鈴を振る巫女が描かれている。「神楽」とあれば容易に鈴を振る巫女がイメージされるのである。(中略)「神楽をまいらす↓鈴女(すずめ) ↓雀」という連鎖がこのなぞの解法であると考ええる。

② 刀の先が落ちた 力落とし

『新かはりなぞづくし』二〇三番に次のようにある。

刀のさきがおちた 力おとし

鈴木(一九八一)は次のように解く。

力が刀になるのを、先が落ちたといった面白味。

この解説は理解しがたい。「力が刀になるのを、先が落ちた」というのは、「力」の字体の先が落ちれば「刀」の字体になるという意味であろう。しかし、なぞは「刀のさきがおちた」とあり、「力」の先が落ちたわけではない。方向が逆である。

私解は以下のように解く。「刀のさき」は「カタナの先頭の音節、仮名」で「カ」。それが落ちたのだから「カ」(片仮名)が落ちた。片仮名の「カ」をそれと事実上同字体の「力」(漢字)に読み替えて「力落とし」。つまり「刀のさきがおちた↓カタナの先が落ちた↓力が落ちた↓力おとし」という手順である。

③ 四四十六 八撥

このなぞは『後奈良院御撰何曾』一六四番に次のようにある。

四々十六 やつはち

「やつはち」は八撥（やつばち）で、胸に付けて撥で打つ楽器。鞆鼓ともいう。能、狂言、歌舞伎でも使用され、中近世では珍しくない楽器である。

このなぞは後世『新撰何曾遊背紐』二八番にも載せられている。しかもこの『背紐』は、他のなぞなぞ集とは違って、なぞの解き方も示しているものである。

四々十六 やつはちとく心は八八也

これで、「四々十六」から「八八」が導かれることはわかるが、どのような手順によるのかはこれだけでは不明である。鈴木（一九八一）は次のように説明する。

四と四で八、十六を分けて八が二つ。ばちと濁るのははちとはちの複数という考え方。

「四四は四十四で八。十六で八と八となり、八が複数だからバチと濁る」ということだが、複数ならば濁るとするのは理解がたい。

本居内遠『後奈良院御撰何曾之解』は次のように誤記、誤脱を主張する。

此何曾は作者の思ひたかへか二四八といふへきなり 二四八はやつなり 八はそのまゝにてやつばちと解るゝなり 四々十六にては四と四とはやつなり 十六を撥にあつれば八あまりてせんかたなし やつとはちと合せて十六とすれ

は四々は不用の語なり 思ふに解きあたる語獅子八撥とあるへきを脱したるにやあらむ さらは四々はた、ちに獅子にあたり

望月の謡曲にも児は八撥をうちあるしは獅子を舞事ありトモ

内遠はこのままでは「四四↓八、十六↓八八」となり、「八」が一つ余つて解けないので、いくつかの代案を提出する。一つは「二四↓八、八と八↓八撥」と解ける。第二案として答えを「獅子八撥」と変える。これならば「四四↓獅子、十六↓八八↓八撥」で「獅子八撥」が導かれる。答えの「獅子八撥」とは謡曲「望月」でシテ小沢が獅子舞を舞い、子方花若が八撥を打つのを示すというのである。

しかし、第一案は問いかけの語を、第二案は答えを改変しているの、にわかには受け入れがたい。具体的な手順は不明だが、『背紐』の編者はこのままで解いているのである。

私解を示そう。前半の「四四」は鈴木同様に「八」を導くと考える。掛け算の「四四」を足し算の「四十四」に読み変えるわけである。問題は後半「十六」であるが、「十六」から掛け算「四四」が導かれる。「四四」となれば前半と同じであるから、これを足し算に読み変え「八」を導く。故に「八八」となり、「八撥」が得られる。まとめると「前半の四四↓四十四↓八、後半の十六↓四四↓四十四↓八。八（前半）八（後半）↓八撥」となる。

ここには、内遠のように誤記、誤脱を設定する必要もない。『背

紐』の説明とも矛盾しない。

④ せどいの山 占屋算

『なぞのほん』六八番に次のようにある。

せどいのやま うらやさん

鈴木(一九八一)は答えを「高野山(乞う野山)」とする。「せどい」せちがう、ねだるなどの意であろうが、他に用例が見当たらない」と解く。「せどい」から「乞う」、「の山」から「野山」が導かれるというのだろう。しかし、これは「高野山」という答え自体が誤読である。このなぞは『なぞのほん』以外にも『新かはりなぞつくし』、『新板なぞづくし』、『風流新撰なぞ尽し』などにある。『なぞのほん』は『天理図書館善本叢書六四』なぞ狂歌『咄の本』に影印がある。また岡雅彦(一九八五)に翻刻がある。翻刻ではこの答えを「うらやさん」と読んでいる。影印もまたそう読める。『新板なぞづくし』、『風流新撰なぞ尽し』のそれぞれの版本もまたいずれも「うらやさん」と判読できる。鈴木は「うらやさん」の「うら」の仮名を「かう」と読みたがえたのである。唯一『新かはりなぞつくし』の活字本(『雑芸叢書第二』)が「せぐひのやま 高野山」とするが、この活字本は誤りが多く、信頼できるものではない。残念ながら『新かはりなぞつくし』は原版本の所在が不明であり、もとの表記を確認することができないが、このなぞが「せどいのやま うらやさん」という問いかけと答えをもつものであることは確実である。「うらやさん(占屋算)」とは算木と筮竹による占い。

勝田敏勝(一九七九)は『新板なぞづくし』の解説で「世渡扉は洛中の小庵の意であるが、背戸野山と発展し、裏野山と言ひ変えられ、うらないを意味する占算と結びつけているのではないかと考える。」とする。また『風流新撰謎尽し』を翻刻し、解説を付す勝田(一九八九)では「世渡扉(せどひ)の山は京都の小庵で、江戸の裏屋に転じた。占屋算(うらやさん)は、占いのこと。」とする。

前者の「洛中の小庵」が「背戸野山」に発展する道筋がわからない。後者は「世渡扉→裏屋。山→さん→算」と解くのである。これで一応は解決がつくが、実はこのなぞの問いかけの言葉には小異がある。このなぞを載せる四種の資料中最も古い『なぞのほん』には先に見たように「せどいのやま」とある。『新板なぞづくし』は「せどびのやま」である。『風流新撰なぞ尽し』は「せどひのやま」とある。「せどび」はおそらく「ど」の濁点に引かれた誤記・誤刻であろう。

ところで、「世渡扉」の読みは「セドヒ」であつて、「セドイ」は確認されない。『日葡辞書』は「Xedofi」として立項して「広々とした適当な場所に建立することができないために、村落の中に建てられたり、村落の中にあつたりする寺(Tera)」と説明する。

古辞書類には以下のように四種類の表記が見られる。

世渡扉…『下学集』など

世渡卑…『文明本節用集』など

世度扉…『伊京集』など

世度卑…『天正十八年本節用集』など

いずれも「セドイ」と読むべき確例はない。古辞書以外の用例にも「セドイ」の確例はない。また、「世渡扉僧」「世渡扉坊主」(いずれも世渡扉に住む僧侶)という語もあり、また『日葡』に「寺」とあることでもわかるように、「世渡扉」はただの「裏屋」とは意味に隔たりがある。いずれにしろ「せどいのやま」が誤りでないとするならば依然なぞは解けていないことになる。

「せどいのやま」が誤りでないなら、どう解けるのか。一つは「世渡扉」に「セドキ(イ)」というハ行転呼音化された読みを認めることである。例えば『角川古語大辞典』は「世渡扉」の読みを「セドイ」としている。しかし右に示したように「セドイ」の確例はない。『日本国語大辞典』『小学館古語大辞典』は「セドイ」の読みを認めていない。「世渡扉」に「セドイ」の読みを認めるのには躊躇を感じる。

もう一つの道は「せどい」を「世渡扉」から離れて解釈することである。私解はこれを「背戸居」と解する。「背戸居」は「背戸(家の背面)住まい」の意味と考える。「裏店、裏屋」の意味の「背戸家」と同義とみるわけである。なぞの解は「せどい↓裏屋↓占屋。やま↓山↓算」となる。

⑤ ときやく 棟上げ
『なぞのほん』一〇四番、『新かはりなぞつくし』一〇二番にある。

ときやく ▲むねあげ(『なぞのほん』)

ときく むねあげ (『新かはりなぞつくし』)

『新かはりなぞつくし』の翻刻は誤りが多いので、『なぞのほん』の本文に依拠して考える。

鈴木(一九八一)は次のように解く。

伽役(または解き役)は、事の旨を申上げるから、旨上げ。「解き役」とは何か不明なのは措くとして、「事の旨を申上げるから、旨上げ」というのはいかがであろうか。「事の旨を申上げる」のは「伽役」「解き役」に限らないし、むしろ「奏者」とか「使者」の方が似つかわしい。

以下が私解である。問いかけの「ときやく」は「吐却」と解する。「吐却」とは嘔吐の意味である。用例を挙げておこう。

vaga fucuchūno firugayeite vomeni caqueto/ iysamani,
namanurui yuuo ippai vōgiauanni mot-/teqite xujinno
mayede nomi, yubiyo nodoni saxi/ irete togiacu xite

(我が腹中を翻いてお目にかきょうと言ひ様に、生ぬるい湯を一杯大茶碗に盛って来て主人の前で飲み、指を喉に差し入れて吐却して)(Esopo no Fabulas 四一ページ)

一方、嘔吐することを「あぐ(あげる)」ともいう。
さいわぬのことでござります。おむねがわるくは、あげて御らんなされませ(『軽口はなし』^{註四}三)

以上から「吐却↓胸あげ↓棟上げ」とつながる。

⑥ 菩薩の上衣 ほうがら

『新かはりなぞつくし』一四六番、『新板なぞづくし』二三番、『風流新撰なぞ尽し』二七番などにある。『新板なぞづくし』を挙げておこう。

一 ほうさつのうわきぬ ▲ほうがら

鈴木（一九八一）は次のように言う。

菩薩の上はば、着ぬは空。^{から}◎ほうがら||棒をいうか。

これだと出来のよいなぞとは言いかねる。

私解は以下のとおりである。

米の異称に「菩薩」がある。

仏には味ひなし、草木に味ひ有といへども、米には味ひなし、それいかにとなれば、古仏砂利変して己^{マイ}に米と成と説れたり、かるが故に人間は米を菩薩といふ、（『慶長見聞集』^{注五}）

「菩薩の上衣」はつまり、稲穂の殻（穂殻）である。「ほがら（穂殻）」を「ほうがら」ともいう。

⑦ 都はいつも湿りこそすれ何ぞ ゑひもせず京

『寒川入道筆記』の七四番にある。

みやこはいつもしめりこそすれ 何ぞ

ゑひもせず京

「ゑひもせず京」はいろは歌の末尾。末尾に「京」を加えるのは了尊の『悉曇輪略図抄』（一二八七年）が最初といわれるが、朝鮮版『伊路波』にも「京」を付けた形で伝わっており、中近世には一般的である。高橋愛次（一九七四）『伊呂波歌考』が

詳しい。

鈴木（一九八一）は、問いかけて「都はいつも湿りこそすれ」と解し、「湿るは憂いに沈むこと。酒にも酔えない。これを酔いもせずにかけたもの」と説明する。鈴木（一九八五）にも「しめるは、湿る。沈んでいる。酔つてうきうきする気分でない。すなわち、京は酔いもせず。」とある。しかしこれではなぞとして面白さに欠ける。「湿る」から「酔えない」と進むのも飛躍に過ぎる。

問いかけては鈴木と同様に解するが、以下のように解きたい。「都はいつも湿っている、乾燥することもない。つまり えずもせず、京↓ゑひもせず京」とする。「え」と「ゑ」の仮名違いはこの資料では問題にならない。

⑧ 向かふの岸暗くして船声して呼ぶ 三味線

これは富士谷成章「おほうみのはら」（『近代和歌打聞』）和歌打聞」とも）にあるなぞである。

むかふのきしくらくして船こゑしてよぶ

三みせん^{注六}

鈴木（一九八一）には「彼岸に達することは思いもよらず、仏法に暗いのは、なま坊主の沙彌。船の音はせん。」とあるが、これは三沢諄治郎（一九五九）に次のようにあるのを踏襲したものである。

「向ふの岸」は「彼岸」、「彼岸が暗い」とは即ち悟道が浅い意であるから、下位僧侶の「沙彌」と解する。「船」の

字を声で呼ぶとは字音で「セン」と読むことである。

私解は既に吉見孝夫(二〇〇二a)に示した。それを摘記すれば以下のようになる。

「のく」でその語を除外するのは二段なぞでしばしば用いられる手法である。そこで「むかふのきし」の「むかふのき」は無になり、「シ」が残る。「くらくして」は「闇」。「声」で音読を意味するのも二段なぞの常套手法である。「船の声」は「船」の音読で「セン」。シ闇セン↓三味線。

注

- 一 日本古典文学大系『御伽草子』(岩波書店 一九五八年七月)による。
- 二 『マイクロフィルム版 本居文庫』(雄松堂書店 一九九七年五月)による。
- 三 『天草版伊曾保物語』(勉誠社 一九七六年三月)による。
- 四 『嘶本大系 第七巻』(東京堂出版 一九七六年三月)による。
- 五 『江戸叢書 巻の式』(名著刊行会 一九六四年九月)による。
- 六 『日本随筆大成第三期第二巻』(吉川弘文館 一九七六年一月)による。

参考文献

岡雅彦(一九八五)「なぞの本(翻刻)」(『国文学研究資料館紀

要』第二号 一九八五年三月)

勝田敏勝(一九七九)「新なぞづくし 風流新撰なぞ尽し 翻刻」

(『叢』第一号 一九七九年四月)

勝田敏勝(一九八九)「叢」創刊号掲載、黄表紙『風流新撰な

ぞ尽し』について、訂正と補足(『叢』第二号 一九七九

年二月)

鈴木棠三(一九八一)『新版ことば遊び辞典』(東京堂出版 一

九八一年十一月)

鈴木棠三(一九八五)『中世なぞなぞ集』(岩波書店 一九八五

年五月)

高橋愛次(一九七四)『伊呂波歌考』(三省堂 一九七四年五月)

三沢諄治郎(一九五九)「中近世の謎について」(『甲南国文』

第三号 一九五九年三月)

吉見孝夫(二〇〇二a)『本居宣長全集』中の「なぞなぞ」略

解(『語学文学』第四〇号 二〇〇二年三月)

吉見孝夫(二〇〇二b)『本居宣長『萬覚』中の二種の「なぞ

づくし』(『札幌国語研究』第七号 二〇〇二年六月)